

「きょうだい型」ステレオタイプの検討¹⁾²⁾

(A study of the birth order stereotypes.)

金山 富貴子³⁾

(Fukiko KANAYAMA)
(大分大学大学院教育学研究科)

笹山 郁生

(Ikuko SASAYAMA)
第四部心理科

平成8年9月9日

人々の間に「きょうだい型」ステレオタイプ(出生順位によって性格が異なっているというステレオタイプ)が存在しているのか、また存在しているとするれば、それは出生順位と性格とが関連しているとする従来の研究結果と一致しているのかについて検討するために、大学生641名を調査対象者として質問紙調査を実施した。その結果、長子は誠実、末っ子は外向的でわがまま、ひとりっ子は外向的でなくわがままといった、出生順位と性格との関連性を検討した従来の研究と一致する「きょうだい型」ステレオタイプの存在が確認された。

ここ数年来、“non-no”等の女性向けの雑誌や著書において、出生順位と性格特性とが関連しているという記事や文章をよく目にする。この出生順位と性格とが関連している、つまり、出生順位によって性格特性が異なるということを称して、畑田(1993)は「きょうだい型」と呼んでいる。この「きょうだい型」とは、畑田によると、人を出生順位によって、長子(きょうだいの一番上)・中間子(二番目以降に生まれた子どもで上下にきょうだいがいる)・末っ子(きょうだいの一番下)・ひとりっ子の4グループに分け、各グループに対して、例えば「長子はきまじめでしっかり者」、「中間子は協調性に富む」、「末っ子は要領が良く甘えん坊」、「ひとりっ子は繊細でわがまま」という特徴がそれぞれにあるとする考えである。

このように長子・中間子・末っ子・ひとりっ子というカテゴリーごとに特有の性格があるとする考え方は、一種のステレオタイプの見方であると考えることができる。すなわち、出生順位と性格とが関連するという話題が存在しているということは、出生順位によって性格特性が異なるというステレオタイプが人々の間に存在している可能性を示唆している。しかし、雑誌や著書で出生順位と性格とが関連していることが話題になってい

るからといって、人々の間に実際にそのようなステレオタイプが存在しているのかどうかはわからない。ただ単に雑誌の記事として「出生順位と性格との間には関連性がある」と述べられているだけであって、実際には人々の間にそのようなステレオタイプは存在していないのかもしれないし、また前述のような雑誌を見ていない人には、そもそも出生順位によって性格が異なるというステレオタイプは存在していないのかもしれない。そこで本研究では、このような「きょうだい型」ステレオタイプが人々の間に実際に存在しているのかどうかについて検討することにする。

ところで、ステレオタイプとは「ある人間集団に固有な属性について人々が持っている信念」(Ashmore & Del Boca, 1981)と定義されている。このようなステレオタイプの中で、世間の人々に信じられよく用いられている代表的なものとしては血液型ステレオタイプがある(渡辺, 1994)。血液型ステレオタイプとは、「A型はまじめ」「AB型は二重人格である」というように、A・B・O・ABの4つの血液型によって人の性格が異なるという信念である。この血液型ステレオタイプと「きょうだい型」は、人をある属性でいくつかのカテゴリーに分け、それぞれに異なった性格特性があると考えている点や、雑誌での扱われ方にお

1) 本論文は、第1筆者が第2筆者の指導のもとに執筆した、平成7年度福岡教育大学教育学部小学校教員養成課程教育学・教育心理学専修の卒業論文を加筆修正したものである。

2) 本研究の実施にあたりご協力いただきました、九州工業大学大学院の権上正善氏をはじめとする多くの方々には厚く感謝いたします。

3) 平成7年度福岡教育大学教育学部小学校教員養成課程教育学・教育心理学専修卒業

いてよく似た性質をもつものと考えられる。しかし血液型と性格については現在のところ明確な関連性は認められておらず、血液型ステレオタイプの妥当性を否定する研究が提出されている。(eg. 大村, 1990; 上瀬・松井, 1996)。つまり血液型ステレオタイプとは、事実とは無関係に形成されているステレオタイプなのである。

これに対して出生順位と性格との間には、明確な関連のあることが従来の研究結果からも明らかにされている。例えば、三木・木村(1954)、依田・深津(1963)、依田・飯嶋(1981)は2人きょうだいの出生順位と性格特性との関連を検討し、長子は「自制的で控えて、仕事が丁寧で、話すよりも聞き手であり、面倒なことを嫌う」のに対して、末っ子は「甘ったれて、親に告げ口をし、おしゃべりでやきもちやきで強情で活動的である」という性格特性のあることを示している。また、浜崎・依田(1985)は3人きょうだいの出生順位と性格特性との関連性を検討し、長子と末っ子に関しては2人きょうだい同様の性格特性のあること、ならびに中間子に関しては、長子や末っ子に比べるとはっきりした性格特性が認められないことを明らかにしている。さらに、依田(1967)は、ひとりっ子の性格には性差があり、男子が「依存的で従順」、女子が「独立的で反抗的」と述べている。すなわちこれらの研究結果は、出生順位と性格特性との間に関連性のあることを示唆しており、各出生順位に該当する性格特性は、前述したように人々がもっていると思われる「きょうだい型」ステレオタイプの特徴とおおよそ一致していると考えられる。このように、世間一般の話題と従来の研究結果とが一致していることから、「きょうだい型」ステレオタイプは出生順位によって性格が異なるという事実をもとに形成されたステレオタイプである可能性が考えられる。

そこで本研究では、「きょうだい型」ステレオタイプが人々の間に実際に存在しているのかどうかについて確認すること、また、もし人々の間に「きょうだい型」ステレオタイプが存在するのであれば、そのステレオタイプの内容は、従来の研究知見や世間一般の話題と一致しているのかどうかについて検討することを、第一の目的とする。

次に本研究では、出生順位によって実際に性格が異なっているのかどうかを確認するために、調査対象者の自己イメージを測定し、それらのイメージを出生順位別に比較検討することにする。もし、出生順位と性格との間の関連性が強いもの

であるならば、当然自己イメージレベルでも、例えば「長子はまじめでしっかり者」といった、従来の研究結果と合致した自己イメージが形成されているものと考えられる。そこで、出生順位によって自己イメージに差異が認められるかどうかを検討することにより、「きょうだい型」ステレオタイプは、血液型ステレオタイプとは異なり、事実に基づいて形成されたステレオタイプであることを確認することを第二の目的とする。

方法

調査対象者 福岡県内の国立大学学生641名(男性220名、女性421名、平均年齢19.44歳)。

調査時期 1995年10月。

質問紙の構成 本研究で用いた質問紙は、性別・年齢・出生順位・きょうだい構成・血液型といった調査対象者の基本的属性に関する質問項目、ならびに現在の自分自身(自己イメージ)・自分と同性の一般的なきょうだい(長子:きょうだいの一番上、中間子:上にも下にもきょうだいがいる、末っ子:きょうだいの一番下、ひとりっ子:上にも下にもきょうだいがいない)に対するイメージ(以下順に長子イメージ・中間子イメージ・末っ子イメージ・ひとりっ子イメージと記す)をたずねる質問項目から構成された。

「きょうだい型」ステレオタイプ測定項目

「きょうだい型」ステレオタイプ測定のための質問項目は、出生順位と性格との関連性を検討した三木・木村(1954)、浜崎・依田(1985)、畑田(1993,1994)、下山(1986)、依田(1967,1990)、依田・深津(1963)、依田・飯嶋(1981)から性格特性と行動特性を示す語を抽出し、KJ法を用いて整理分類し26項目にまとめたものを用いた。なおこれらの文献のうち、下山と畑田は心理学者以外の人物によるものであった。さらに、渡辺(1994)から選択した血液型ステレオタイプを代表する4項目を加え、計30項目を用いることにした。

手続き 調査は質問紙形式で実施した。各きょうだいに対するイメージを問う質問は、提示順序効果を防ぐため、回答するきょうだいの順番をすべての順列となるように24種類作成し、ランダムに配布した。なお質問項目には前述の30項目を用いて、自己イメージ・各きょうだいイメージそれぞれに対して「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの7件法により回答を求めた。質問紙は、①自己イメージ、②自分と同性の一般的なきょうだいイメージ(長子イメージ・中間子イメージ・末っ子イメージ・ひとりっ子イメー

ジの4種類),③基本的属性に関する質問の順に回答させた。その際、各きょうだい型イメージを明確にしてもらうために、調査者の指示に従って、全調査対象者に同時進行で回答させた。

結 果

1. 調査対象者の基本的属性

本研究の調査対象者の出生順位と血液型を、性別にTable1-1,ならびにTable1-2にそれぞれ示した。Table1-1より、本研究の調査対象者には長子

が多く、ひとりっ子は全体の1割以下と少ないこと、ならびに各出生順位における調査対象者の男女の比率は異なり($\chi^2_{(3)}=10.45, p<.05$),長子では女性の比率が高く、末っ子では男性の比率が高いことが示された。またTable1-2より、調査対象者の血液型の分布は日本人一般の分布(能見,1984)とほぼ近い比率を示したが、O型の比率がやや少なく、血液型の分布に性差は認められないことが示された($\chi^2_{(4)}=2.27, n.s.$)。

Table 1-1 本研究で用いた調査対象者の出生順位別人数

出生順位	男 性	女 性	合 計
長 子	88(40.0)	222(52.7)	310(48.4)
中 間 子	38(17.3)	63(15.0)	101(15.8)
末 っ 子	80(36.4)	110(26.1)	190(29.6)
ひとりっ子	14(6.4)	26(6.2)	40(6.2)
合 計	220(100.0)	421(100.0)	641(100.0)

* () 内はパーセントを示している。

* 四捨五入のため () 内の数値は合計100 %にならない。

Table 1-2 本研究で用いた調査対象者の血液型別人数

血 液 型	男 性	女 性	合 計	日本人の平均
A 型	91(41.4)	167(39.7)	258(40.2)	(38.1)
B 型	45(20.5)	97(23.0)	142(22.2)	(21.8)
O 型	50(22.7)	108(25.7)	158(24.6)	(30.7)
A B型	22(10.0)	31(7.4)	53(8.3)	(9.4)
不 明・未回答	12(5.5)	18(4.3)	30(4.7)	(-)
合 計	220(100.0)	421(100.0)	641(100.0)	

* () 内はパーセントを示している。

* 四捨五入のため () 内の数値は合計100 %にならない。

2. きょうだいイメージの構造分析

きょうだいイメージの構造を知るために、きょうだいイメージ(長子イメージ・中間子イメージ・末っ子イメージ・ひとりっ子イメージ)に対する評定をすべてまとめて、前述の30項目に対して主因子法による因子分析をおこなった。その際共通性の著しく低かった6項目(共通性.20以下)を削除し、最終的に24項目を用いて分析をおこなった。因子分析は、因子の解釈可能性から3因子を抽出し、varimax回転をおこない、その結果をTable 2に示した。なお、3因子までの累積寄与率は46.7%であり、抽出した因子について第1因子から順に「誠実」因子、「外向性」因子、「わがまま」因子と命名した。

次に、自己イメージと各きょうだい型イメージ

ごとに、因子負荷量が.35以上の項目を因子別に単純加算して合成得点を算出し、それらをそれぞれ「誠実」得点、「外向性」得点、「わがまま」得点とした。

3. 出生順位によるきょうだいイメージの差異の検討

出生順位によってきょうだいイメージに差異が認められるかどうかを検討するにあたり、まず因子ごとに算出した合成得点を用いて、性×出生順位ごとにきょうだいイメージの平均値を算出し、Table 3に示した。なお本研究では、ひとりっ子の調査対象者数が極端に少なかったため(Table 1-1参照)、以後の分析では、ひとりっ子の調査対象者のデータは除外することにした。

Table 2 きょうだいイメージの因子分析：varimax 回転後の因子負荷量

項 目 名	誠実因子	外向性因子	わがまま因子
責任感が強い	0.8537	0.0538	-0.0527
頼りになる	0.8005	0.0733	-0.1046
分別がある	0.7412	0.0330	-0.1872
堅実である	0.7364	-0.1105	-0.0340
根気がある	0.7272	0.0733	-0.0390
きまじめである	0.7010	-0.2856	0.0708
思いやりがある	0.6849	0.1383	-0.2598
知性的である	0.6478	-0.0697	0.0262
面倒なことをしない方である	-0.4590	0.1649	0.2338
無頓着である	-0.4371	0.2206	0.1168
神経質である	0.3548	-0.3463	0.3467
おしゃべりである	-0.1683	0.7119	0.1269
ひょうきんである	-0.0697	0.7109	-0.0531
積極的である	0.2487	0.6406	0.1194
親しみやすい	0.2121	0.6243	-0.2773
好奇心が強い	-0.0909	0.5938	0.2819
感情が豊かである	0.0103	0.5474	0.0857
要領がいい	-0.0775	0.4867	0.0419
人見知りしやすい	-0.0334	-0.4022	0.3144
傲慢である	-0.3219	0.0085	0.6486
頑固である	0.0653	0.0497	0.6324
見栄っぱりである	-0.2094	0.0668	0.6266
わがままである	-0.5728	0.0607	0.5943
負けず嫌いである	0.2325	0.2785	0.3904
因子負荷量の2乗和	5.5874	3.2797	2.3295
因子の寄与率 (%)	23.2809	13.6654	9.7064
累積寄与率 (%)	23.2809	36.9464	46.6528

* 0.35 は因子負荷量が.35以上の項目である。

次に、これらの合成得点に差異が認められるかどうかを調べるために、因子ごとに2(性)×3(出生順位)×4(きょうだい型イメージ：被験者内要因)の3要因分散分析をおこなった。なお本研究においては、長子・中間子・末っ子・ひとりっ子

に対するきょうだいイメージが異なるかどうか、またそれらのイメージが出生順位や性によって異なるかどうかを検討することを目的としている。したがって、以下ではきょうだいイメージの主効果、ならびにイメージとその他の要因との交互作

Table 3 出生順位別きょうだいイメージの平均値と標準偏差

	長子イメージ		中間子イメージ		末っ子イメージ		ひとりっ子イメージ	
	N	mean(SD)	N	mean(SD)	N	mean(SD)	N	mean(SD)
「誠実」因子								
長子								
男性	86	63.849(9.3)	86	51.128(10.7)	86	43.244(9.4)	86	46.767(8.8)
女性	219	65.347(7.2)	219	51.438(8.1)	219	41.388(9.4)	219	42.708(7.7)

中間子								
男性	38	61.789(9.5)	38	53.158(8.9)	38	44.421(10.3)	38	46.711(8.7)
女性	63	63.111(10.0)	63	56.444(7.7)	63	42.317(7.5)	63	44.079(8.0)

末っ子								
男性	78	60.231(10.2)	78	55.436(8.9)	78	43.718(9.4)	78	47.115(10.1)
女性	110	64.264(8.6)	110	52.564(9.2)	110	41.418(8.6)	110	43.827(9.5)
「外向性」因子								
長子								
男性	86	37.686(6.9)	86	38.721(7.2)	86	40.977(7.2)	86	33.605(7.4)
女性	222	35.383(6.7)	222	39.401(6.8)	222	41.923(6.3)	222	34.491(6.8)

中間子								
男性	36	37.917(6.6)	36	38.972(6.4)	36	39.611(5.6)	36	31.333(4.9)
女性	62	37.532(7.7)	62	40.210(6.6)	62	42.048(6.6)	62	35.210(7.7)

末っ子								
男性	79	39.405(6.6)	79	39.443(6.9)	79	40.709(6.3)	79	32.342(6.9)
女性	109	36.138(6.5)	109	38.734(6.5)	109	42.468(5.9)	109	34.826(7.6)
「わがまま」因子								
長子								
男性	88	21.966(4.4)	88	21.500(5.7)	88	25.000(4.1)	88	26.386(4.6)
女性	222	21.293(4.1)	222	20.414(4.7)	222	24.532(4.4)	222	26.374(4.2)

中間子								
男性	38	20.842(4.8)	38	22.316(5.4)	38	24.500(4.6)	38	25.026(4.9)
女性	63	21.762(5.1)	63	21.825(4.0)	63	23.810(5.0)	63	25.460(4.4)

末っ子								
男性	79	22.633(5.7)	79	20.772(5.2)	79	24.924(4.6)	79	25.620(5.1)
女性	108	20.213(5.2)	108	20.778(4.3)	108	26.176(4.3)	108	26.685(4.3)

用についてのみ検討することにした。

誠実因子 誠実因子においては、イメージの主効果が有意であり ($F_{(3,1764)}=487.66, p<.001$)、多重比較の結果、すべてのイメージ間において有意差が認められた (長子イメージ>中間子イメ

ジ>ひとりっ子イメージ>末っ子イメージ)。

また出生順位×イメージの交互作用が有意であった ($F_{(6,1764)}=3.18, p<.01$)。下位検定の結果、長子イメージ ($F_{(2,2352)}=3.22, p<.05$; 長子>末っ子) と中間子イメージ ($F_{(2,2352)}=6.45,$

$p < .01$; 中間子・末っ子 > 長子) において出生順位の単純主効果が有意であり, 末っ子以外(長子と中間子)は自分の属している「きょうだい型」に対して有意に高い誠実イメージを持っていることが示された (Figure 1-1)。さらに, 性×イ

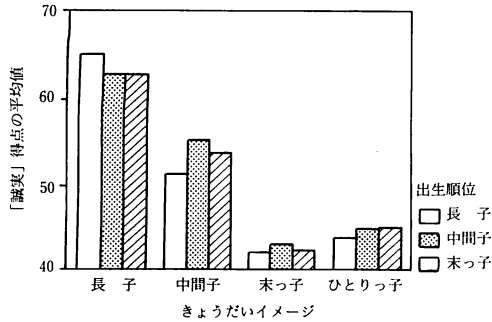


Figure 1-1 調査対象者の出生順位×きょうだいイメージ別「誠実」得点の平均値

メージの交互作用が有意であり ($F_{(3,1764)}=8.95, p < .001$), 下位検定の結果, 長子イメージ ($F_{(1,2352)}=7.43, p < .01$; 女性 > 男性), 末っ子イメージ ($F_{(1,2352)}=6.20, p < .05$; 男性 > 女性), ひとりっ子イメージ ($F_{(1,2352)}=15.75, p < .001$; 男性 > 女性) において性差が認められた (Figure 1-2)。

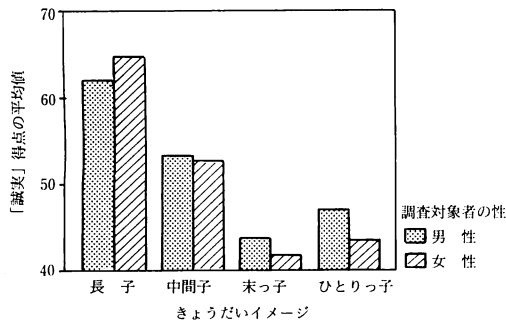


Figure 1-2 調査対象者の性×きょうだいイメージ別「誠実」得点の平均値

これらの結果から, 誠実因子では, 全体的に長子は「誠実」であるのに対して, 末っ子とひとりっ子はあまり誠実ではないというイメージをもたれていること, ならびに長子と中間子は自分の属するきょうだい型(長子では長子イメージ, 中間子では中間子イメージ)に対して, 相対的により好意的なイメージを持っていることが示された。また, 男性は末っ子とひとりっ子に対して, 女性は長子に対して, それぞれ異性よりも誠実なイメージを持っていることも示された。

外向性因子 外向性因子においては, イメージの主効果が有意であり ($F_{(3,1764)}=112.32, p < .001$), 多重比較の結果, すべてのイメージ間で有意差が認められた(末っ子イメージ > 中間子イメージ > 長子イメージ > ひとりっ子イメージ)。

また性×イメージの交互作用が有意であり ($F_{(3,1764)}=9.94, p < .001$), 下位検定の結果, 調査対象者が男性の場合には, 末っ子イメージと中間子イメージとの間, ならびに中間子イメージと長子イメージとの間に有意な差がない ($F_{(3,1764)}=66.06, p < .001$; 末っ子イメージ・中間子イメージ > 中間子イメージ・長子イメージ > ひとりっ子イメージ) のに対して, 女性の場合にはすべてのイメージ間に有意な差が認められた ($F_{(3,1764)}=56.20, p < .001$; 末っ子イメージ > 中間子イメージ > 長子イメージ > ひとりっ子イメージ)。さらに, 長子イメージ ($F_{(1,2352)}=9.48, p < .01$; 男性 > 女性), 末っ子イメージ ($F_{(1,2352)}=7.07, p < .05$; 女性 > 男性), ひとりっ子イメージ ($F_{(1,2352)}=14.03, p < .001$; 女性 > 男性) において性の単純主効果が有意であった。(Figure 2)。

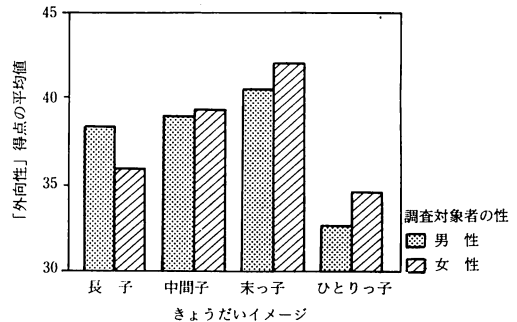


Figure 2 調査対象者の性×きょうだいイメージ別「外向性」得点の平均値

これらの結果から, 外向性因子では, 全体的に末っ子は外向的なイメージをもたれており, 男性は長子に対して, 女性は末っ子とひとりっ子に対して, それぞれ異性よりも外向的なイメージを持っていることが示された。

わがまま因子 わがまま因子については, イメージの主効果が有意であり ($F_{(3,1776)}=126.44, p < .001$), 多重比較の結果, 長子イメージと中間子イメージの間のみ有意差が認められなかった(ひとりっ子イメージ > 末っ子イメージ > 長子イメージ・中間子イメージ)。

また出生順位×イメージの交互作用 ($F_{(6,1776)}=3.22, p < .001$), ならびに出生順位×性×イメージの交互作用が有意であった ($F_{(6,1776)}=2.56,$

$p < .001$)。そこで下位検定をおこなった結果、イメージの単純・単純主効果について検討すると、調査対象者が男性の場合、長子 ($F_{(3,1776)} = 21.09, p < .001$) では、ひとりっ子イメージ・末っ子イメージは長子イメージ・中間子イメージと比較して平均値が高いこと、中間子 ($F_{(3,1776)} = 14.30, p < .001$) では、ひとりっ子イメージは長子イメージ・中間子イメージと比較して平均値が高く、また末っ子イメージは中間子イメージと比較して平均値が高いこと (ひとりっ子イメージ・末っ子イメージ $>$ 末っ子イメージ・長子イメージ $>$ 長子イメージ・中間子イメージ), 末っ子 ($F_{(3,1776)} = 18.52, p < .001$) では、ひとりっ子イメージ・末っ子イメージ間にのみ有意差が認められないこと (ひとりっ子イメージ・末っ子イメージ $>$ 長子イメージ $>$ 中間子イメージ) が示された。一方、調査対象者が女性の場合、長子は、長子イメージ・中間子イメージ間にのみ有意差が認められなかった ($F_{(3,1776)} = 29.24, p < .001$; ひとりっ子イメージ $>$ 末っ子イメージ $>$ 長子イメージ・中間子イメージ) のに対して、中間子 ($F_{(3,1776)} = 11.88, p < .001$) と末っ子 ($F_{(3,1776)} = 44.70, p < .001$) においては、ひとりっ子イメージ・末っ子イメージは長子イメージ・中間子イメージと比較して平均値が高いことが示された。

さらに、出生順位の単純・単純主効果について検討すると、調査対象者が男性の場合、長子イメージにおいて傾向差 ($F_{(2,2368)} = 2.849, p < .10$; ただし多重比較の結果有意差なし) が認められたのに対して、調査対象者が女性の場合、末っ子イメージにおいて有意差が認められた ($F_{(2,2368)} = 5.12, p < .01$; 末っ子 $>$ 長子・中間子) (Figure 3-1, 3-2)。

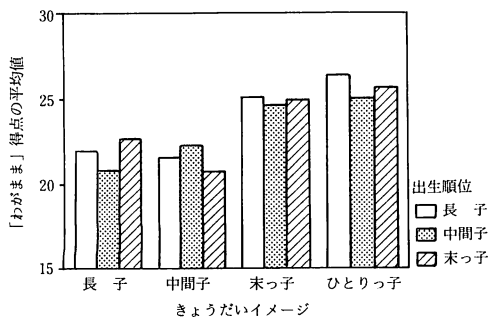


Figure 3-1 調査対象者の出生順位×きょうだいイメージ別「わがママ」得点の平均値 (男性被験者)

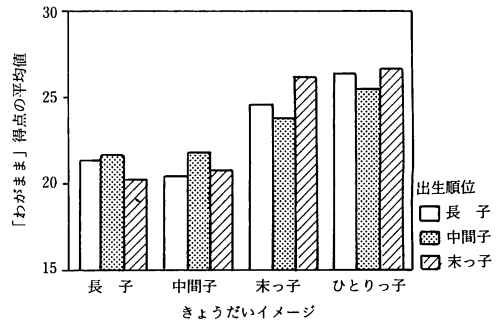


Figure 3-2 調査対象者の出生順位×きょうだいイメージ別「わがママ」得点の平均値 (女性被験者)

分散分析の結果、末っ子とひとりっ子に対しては、全般的傾向として、わがまなイメージがもたれていること、ならびに末っ子は自分が属するきょうだい (末っ子イメージ) に対してわがまなイメージをもっていることが明らかになった。まとめ 出生順位によるきょうだいイメージの差異を検討するために、実施した分散分析の結果を整理しFigure 4に示した。なおFigure 4では、各出生順位に対して、人々がどのようなイメージをより強くもっているのかを明確に示すために、算出した各因子の合成得点の平均値を各因子に含まれる項目数で割った値を示した。

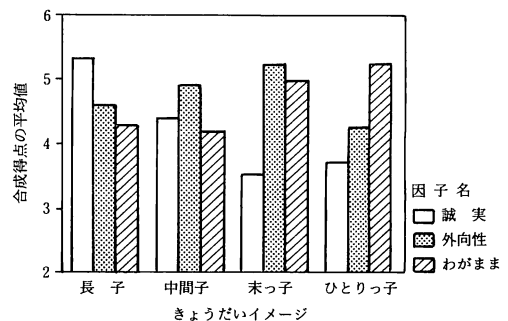


Figure 4 本研究の結果明らかになった「きょうだい型」ステレオタイプ

Figure 4より、長子は「誠実」、末っ子は「外向的でわがママ」、ひとりっ子は「外向的ではないがわがママ」というイメージをもたれているのに対して、中間子には特徴的なイメージは認められないことが示された。なお出生順位と性格特性との関連についてこれまでなされてきた研究の結果、ならびに本研究の結果明らかになった「きょうだい型」ステレオタイプについてTable 4に示した。

Table 4 出生順位と性格に関する従来の研究結果や雑誌などにみられる「きょうだい型」ステレオタイプと本研究の結果明らかになった「きょうだい型」ステレオタイプ

	長 子	中 間 子	末 っ 子	ひとりっ子
三木・木村 (1954)	兄) 慎重		弟) わがまま	
兄的性格と弟的性格	自制的 指導的	—————	従属的 飽きやすい	—————
浜崎・依田 (1985)	自分の用事を押しつける	よく考えないで失敗する	両親に甘える	
出生順位と性格	控え目	面倒がらずに仕事する	両親に告げ口をする	
- 3人きょうだいの 場合 -	仕事が丁寧 面倒なことはしない 遠慮する	気に入らないと黙り込む	外で遊ぶことが好き やきもちやき お調子者	—————
依田 (1967)				男) 依存的・従順
ひとりっ子の性格				女) 独立的・反抗的
畑田 (1993)	きまじめ	自由気まま	要領がいい	繊細
「兄弟姉妹型」	保守的	協調性に富む	甘えん坊	わがまま
人間学	慎重 しっかり者	八方美人	反抗的 大胆	
本研究	誠実		外向的	外向的でない
「きょうだい型」	責任感が強い		おしゃべりである	おしゃべりでない
ステレオタイプの検討	頼りになる 分別がある	—————	ひょうきんである 積極的である わがまま 傲慢である 頑固である 見栄っ張りである	ひょうきんでない 積極的でない わがまま 傲慢である 頑固である 見栄っ張りである

Table 4 より、本研究で示された「きょうだい型」ステレオタイプは、従来の研究結果とほぼ一致していることが明らかになった。

4. 自己イメージの差異の検討

前述の合成得点について、性×出生順位別、ならびに血液型別に自己イメージの平均値を算出し Table 5, Table 6 にそれぞれ示した。

次に、出生順位によって自己イメージに差異が認められるかどうかを検討するために2(性)×4(出生順位)の2要因の分散分析を行った。なお、ここではひとりっ子も分析に含めた。分散分析の結果、すべての因子において、性の主効果(「誠実」因子： $F_{(1,628)}=0.01, n.s.$ ；「外向性」因子： $F_{(1,631)}=0.42, n.s.$ ；「わがまま」因子： $F_{(1,630)}=0.57, n.s.$)、出生順位の主効果(「誠実」因子： $F_{(3,628)}=1.45, n.s.$ ；「外向性」因子： $F_{(3,631)}=1.15, n.s.$ ；「わがまま」因子： $F_{(3,630)}=0.98, n.s.$)、ならびに交互作用(「誠実」因子： $F_{(3,628)}=1.$

02, $n.s.$ ；「外向性」因子： $F_{(3,631)}=0.52, n.s.$ ；「わがまま」因子： $F_{(3,630)}=0.09, n.s.$)のいずれも有意ではなく、自己イメージは出生順位によって異なることが示された。

同様に、血液型によって自己イメージに差異が認められるかどうかを検討するために、2(性)×4(血液型)の2要因の分散分析を行った。その結果、すべての因子において、性の主効果(「誠実」因子： $F_{(1,598)}=0.07, n.s.$ ；「外向性」因子： $F_{(1,601)}=0.49, n.s.$ ；「わがまま」因子： $F_{(1,600)}=0.25, n.s.$)、血液型の主効果(「誠実」因子： $F_{(3,598)}=1.15, n.s.$ ；「外向性」因子： $F_{(3,601)}=0.68, n.s.$ ；「わがまま」因子： $F_{(3,600)}=0.03, n.s.$)、ならびに交互作用(「誠実」因子： $F_{(3,598)}=1.17, n.s.$ ；「外向性」因子： $F_{(3,601)}=0.30, n.s.$ ；「わがまま」因子： $F_{(3,600)}=0.74, n.s.$)のすべてが有意ではなく、血液型によっても自己イメージは異なることが示された。

Table 5 出生順位別自己イメージの合成得点の平均値と標準偏差

	長子		中間子		末っ子		ひとりっ子	
	N	mean(SD)	N	mean(SD)	N	mean(SD)	N	mean(SD)
誠実因子								
男性	87	52.126(10.3)	38	51.711(7.9)	80	52.525(7.5)	14	50.357(10.4)
女性	220	51.409(7.9)	62	54.258(7.0)	109	52.229(7.0)	26	51.269(6.2)
外向性因子								
男性	89	36.708(8.3)	38	34.868(6.6)	80	36.400(6.8)	14	34.714(10.9)
女性	220	37.091(6.6)	63	35.921(6.5)	109	36.028(7.1)	26	37.231(7.3)
わがまま因子								
男性	88	23.159(4.5)	38	23.526(5.6)	80	23.063(4.5)	14	23.643(4.5)
女性	220	22.836(4.4)	63	23.444(3.8)	109	22.624(4.4)	26	23.923(3.9)

Table 6 血液型別自己イメージの合成得点の平均値と標準偏差

	A		B		O		AB	
	N	mean(SD)	N	mean(SD)	N	mean(SD)	N	mean(SD)
誠実因子								
男性	90	52.589(7.7)	45	50.689(10.2)	49	52.204(7.6)	22	54.500(9.9)
女性	167	52.868(7.8)	97	51.619(8.1)	105	51.581(7.2)	31	50.774(5.2)
外向性因子								
男性	91	35.780(7.7)	45	36.756(7.6)	50	36.660(7.5)	22	36.227(6.8)
女性	166	36.602(6.9)	97	36.505(7.4)	108	37.435(6.4)	30	35.500(6.4)
わがまま因子								
男性	90	23.478(4.8)	45	23.289(4.8)	50	22.500(4.7)	22	23.136(3.8)
女性	166	22.819(4.2)	97	22.835(4.6)	107	23.224(4.5)	31	23.258(4.1)

考 察

1. 「きょうだい型」ステレオタイプが存在

本研究は、出生順位によって性格特性が異なるというステレオタイプが人々の間に存在しているのか、またもしそのようなステレオタイプが存在しているとしたら、それはどの程度明確なものなのかについて検討することを目的とした。

結果より、きょうだいイメージについてはすべての因子において主効果が有意であり、人々は、各きょうだいに対して長子は「誠実」、末っ子は「外向的でわがまま」、ひとりっ子は「外向的でなくわがまま」といった異なったイメージを持っていることが示された (Figure 4)。なお、中間子には特徴的なイメージがなかった。このことは、中間子においては、人々は明確なステレオタイプを持っていないことを示しているものと考えられる。

次に、「きょうだい型」ステレオタイプにおける性差を検討する。誠実因子においては、長子イメ

ジにおいて性差が認められ、長女イメージの方が長男イメージよりも、より誠実であると思われていた。また外向性因子においては、Figure 2より、男性における長子イメージが中間子イメージと同程度に高かった。しかし、全般的傾向としてはイメージの性差はそれほど大きなものではなかった。

このような本研究の結果は、長男よりも長女の方がまじめで外向的ではないというイメージを持たれていることを示している。これは長女が、1番目に生まれた子どもであるうえに女の子であることが原因であると思われる。このことについて、依田 (1990) は、長子は親にとって初めての子供なので育児法が分からず神経質になり厳しく躾られる傾向があり、また「姉は望ましい性格をもつことをかなり期待されていて、しかも望ましくない性格をもつことは許されない」(波多野, 1963; 依田, 1990より引用) 傾向にあると述べている。このように、特に長女に対して親の躾や期待は厳

しいので、その結果として、長女はまじめに育つだろうという予想が人々の間になされることが考えられる。そしてこのような予想が長子イメージにも反映されたため、長女の方がまじめで外向的ではないといったステレオタイプにおける性差が生じたものと思われる。

さらに、出生順位によって「きょうだい型」ステレオタイプがどのように異なっていたのかについて検討する。誠実因子とわがまま因子において、出生順位とイメージの交互作用は有意ではあったものの、全般的傾向としては、出生順位によるイメージの差はそれほど大きくないこと、つまり、どの出生順位の人とも同じようなきょうだいイメージをもっていることが示された。また、長子と中間子は自分の属する「きょうだい型」に対して、誠実因子においてはより「誠実」であり、わがまま因子においてはより「わがままではない」というように、自己の所属している集団に対してポジティブなイメージを持っていたのに対して、末っ子は、自分の所属している「末っ子」という集団に対して「わがまま」というネガティブなイメージをもっていることが示された。

このように、自己の所属している集団に対してポジティブなイメージを持つ傾向は、本研究を通して全般的に認められたものであった。このような結果は、「内集団ひいき」(eg. Billig & Tajfel, 1973)の影響によるものと考えられる。このような「内集団ひいき」が、きょうだいに対して形成されるイメージにも反映されたため、本研究の結果に示されたように、自分の所属する集団に対するイメージがより好意的に評価されたものと考えられる。しかし本研究においては、末っ子が自己の所属する集団である末っ子に対してネガティブなイメージを持っていたことから、必ずしもすべての場合において「内集団ひいき」的なイメージが形成されるとは限らないことが明らかにされた。これは、人々が末っ子に対して悪いイメージを持っているということ、末っ子自身が自覚しているためではないかと思われる。

本研究の結果より、きょうだい型ステレオタイプの存在が確認されたので、次に、そのステレオタイプが従来の研究知見と一致しているかどうかについて検討する。

浜崎・依田(1985)は3人きょうだいの出生順位と性格との関連を、依田(1967)はひとりっ子の性格をそれぞれ検討している。それらを整理したものをTable 4に示した。Table 4より、長子は「思いやりがありまじめで、遠慮深く逃避的

など、全般的に誠実であることを、中間子は「面倒くさげに仕事に取り組むが、よく考えないので失敗も多く、気に入らないと黙り込む」という特徴はあるものの、「性格特性はあまりはっきりしていない」(浜崎・依田)ことを、末っ子は「積極的で要領がよく頑固でわがまま」など、全般的に外向的でわがままなことを、ひとりっ子は、男子が「依存的で従順」、女子が「独立的で反抗的」と性差があることをそれぞれ示している。これらの研究と本研究の結果明らかにされたステレオタイプとを比較検討すると、その内容はほぼ一致する傾向にあった。

なお中間子については、従来の研究知見、ならびに本研究の結果のいずれにおいても特徴的なイメージが認められなかった。実際の性格に明確な差が認められなかった原因について、浜崎・依田は「中間子は上下との性別や年齢差の組み合わせが多様であり生育環境が個別に異なるため、性格も個別に異なってくる」と述べている。本研究の中間子イメージにおいても、中間子は上下との性別や年齢差の組み合わせが多様多様であるがために、一貫したイメージが形成されなかったものと考えられる。

2. 出生順位による自己イメージの差異の検討

出生順位と性格との間に関連があるのであれば、出生順位によって自己イメージも異なってくるものと考えられる。そこで本研究では、自己イメージが出生順位によって異なるかどうかを検討したが、すべての因子において有意な主効果、および交互作用が認められず、出生順位と実際の性格との関連性は自己イメージのレベルでは確認されなかった。また自己イメージを血液型別にみみると、これもすべての因子において有意差が認められず、血液型と実際の性格とは関係がないという従来の心理学の知見と同様の結果が示された。

出生順位によって自己イメージに差が認められなかった原因の一つには、調査対象者の年齢層が従来の研究と本研究とでは異なっていたことが考えられる。従来の出生順位と性格の関連性についての研究では、三木・木村(1954)は12才から14才、依田・深津(1963)は10才から14才、依田・飯嶋(1981)は11才、浜崎・依田(1985)は10才から14才の小中学生を調査対象者にしてきた。これに対して、本研究では調査対象者が大学生であった。大学生は、小中学生よりも自己が確立されているであろうし、家族と離れて一人暮らしをする学生も多い。成長に伴って自己をとりまく世

界が家族の外へと広がり、きょうだいを意識しなくなるために、出生順位によって自己イメージに差異が認められないという結果になったのではないかと思われる。

また原因の二つめとして、出生順位と性格との関連性を検討するときの比較方法が異なっていることが考えられる。従来の研究では「きょうだいのうち、(ある特徴に)より当てはまるのはどちらか」と質問し、母親には子ども同士の比較を、きょうだい同士には自己ときょうだいとの比較をさせている。つまり従来の研究においては、きょうだい内での比較がなされているのである。それに対して、本研究では自己イメージを測定しているのだが、調査対象者は自己のイメージを想起する時に、必ずしもきょうだいとの比較をおこなっているわけではないものと思われる。前述したように、大学生は行動範囲が広がっているので、自己イメージを回答する際にはきょうだいとの比較よりはむしろ友人などとの比較をおこないやすいものと考えられる。そのため、自己イメージを出生順位別に比較してみても差が認められなかったのかもしれない。つまり、調査対象者は「きょうだいと比べるとどちらがまじめか」と問われれば、「どちらかといえば自分の方がまじめである」と答えても、「あなたはまじめか」と問われた時、まわりの友だちが非常にまじめならば、「そうでもない」と答えることが考えられるのである。このように考えると、従来の研究で示された出生順位と性格との関連性は、きょうだい内での比較においてのみ有効なものであることが推測される。

出生順位によって自己イメージに差異が認められなかった原因の三つめとしては、本研究においては、きょうだい間の年齢差を考慮していなかったことが考えられる。Koch(1955,1956a,1956b; 依田・深津, 1963より引用)は、「きょうだい間の年齢差も性格特性のあらわれ方と関係しており、2歳～4歳の年齢差であるときょうだいの性格的差異が最も明確にあらわれる」と述べている。しかし本研究では、きょうだい間の年齢差を考慮せずに分析を実施している。したがって、きょうだいとの年齢差が2歳～4歳の者に調査対象者を限定して分析した場合、自己イメージの差異がもう少し明確になった可能性も考えられる。

3. 総合的考察

本研究の結果より、人々の間にはきょうだいで対して、長子は「誠実」、末っ子は「外向的だがママ」、ひとりっ子は「外向的ではないが、わがま

ま」といったステレオタイプの存在していることが確認された。また本研究の結果明らかとなったステレオタイプは、各きょうだい型に対する従来の研究知見、および雑誌において示されていた性格特性と一致していた。したがって、「きょうだい型」ステレオタイプが人々の中に明確に存在しているものと考えられる。

しかし本研究では、出生順位と性格との関連性は、自己イメージレベルでは確認できなかった。このことから「きょうだい型」ステレオタイプも血液型ステレオタイプと同様に、事実に基づいていないのにもかかわらず形成されているステレオタイプである可能性が考えられる。すなわち本研究の結果は、従来の研究知見である出生順位と性格との関連性が、出生順位と性格とが関連しているというステレオタイプに基づいて調査対象者自身が自己を捉えていたためであったり、親がステレオタイプの観をしてきた結果である可能性を示唆している。つまり自己イメージレベルで出生順位による性格の差がみられなかったという本研究の結果より、従来の研究の結果明らかにされた出生順位と性格特性との間の関連性は、少なくともそれほど強いものではないことが考えられるのである。

なお本研究では、出生順位によって性格は異なっているというステレオタイプの存在は確認されたのだが、それは質問紙で回答させることによって「きょうだい型」ステレオタイプが顕在化したものであり、日常生活においては、他者認知の際に「きょうだい型」ステレオタイプがそれほど用いられていない可能性が考えられる。そこで、どの程度日常生活の中で「きょうだい型」ステレオタイプが用いられているのかを今後検討する必要があると思われる。またもし日常生活において「きょうだい型」ステレオタイプが用いられているとすれば、そのステレオタイプは実際の自己認知や他者認知において、どのように用いられ、またどのように影響しているのかについても、あわせて検討する必要があるものと思われる。

引用文献

- Ashmore, R.D., & Del Boca, F.K. 1981 Conceptual approaches and stereotyping. In D.L. Hamilton (Ed.), *Cognitive processes in stereotyping and intergroup behavior*. Lawrence Erlbaum Associates. Hillsdale: New Jersey. Pp.1-35.
- Billig, M. & Tajfel, H. 1973 Social categorization and similarity in intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 3, 27-52.
- 浜崎信行・依田明 1985 出生順位と性格 (2); 3人きょうだいの場合 横浜国立大学教育紀要, 25, 187-196.
- 畑田国男 1993 「兄弟姉妹型」人間学 主婦と生活社
- 畑田国男 1994 兄弟・姉妹型にみる最強のコンビ相性学 日本実業出版社
- 波多野誼余夫 1963 家庭における伝統的序列性と価値観の近代化; きょうだい差別をめぐって 児童心理, 11, 30-36.
- 上瀬由美子・松井豊 1996 血液型ステレオタイプの変容の形; ステレオタイプ変容モデルの検証 社会心理学研究, 11, 170-179.
- Koch, H.L. 1955 The relation of certain family constellation characteristics and the attitudes of child toward adults. *Child Development*, 26, 13-40.
- Koch, H.L. 1956a Attitudes of young children toward their peers as related to certain characteristics of their siblings. *Psychological Monographs*, 70, 1-41.
- Koch, H.L. 1956b Sissiness and tomboyishness in relation to sibling characteristics. *Journal of Genetic Psychology*, 88, 211-217.
- 三木安正・木村幸子 1954 兄的性格と弟的性格; 双生児研究その1 教育心理学研究, 2, 69-78.
- 能見正比古 1984 血液型エッセンス 角川書店
- 大村政男 1990 血液型と性格 福村出版
- 下山啓 1986 兄弟姉妹人間学 徳間書店
- 渡辺席子 1994 血液型ステレオタイプ形成におけるプロトタイプとイグゼンブラの役割 社会心理学研究, 10, 77-86.
- 依田明 1967 ひとりっ子・末っ子 大日本図書
- 依田明 1990 きょうだいの研究 大日本図書
- 依田明・深津千賀子 1963 出生順位と性格 教育心理学研究, 11, 239-246.
- 依田明・飯嶋一恵 1981 出生順位と性格 横浜国立大学教育紀要, 21, 117-127.